

丸子山遺跡

県道三隅美都線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2010年3月
益田市教育委員会

序

益田市は高津川と益田川によって形成された広い平野部を抱え、後背の山間部には広大な広葉樹林を擁し、この恵まれた自然の恵みと穏やかな気候により古くから人々が生活していたことを示す多くの遺跡が市域全体に数多く分布しています。

さて、このたび県道三隅美都線改良工事に伴い丸子山遺跡の発掘調査を実施したところ、中世遺跡の一端が明らかになり、貴重な資料を得ることができました。

益田川上流域に位置する美都町については、近年の発掘調査により、中世を中心とする重要な埋蔵文化財が発見されています。その成果から、中世益田氏との関連が一段と注目を集めるところとなりました。今回の調査地、宇津川地区の養老谷集落は、三隅川の上流に位置し、平安時代の養老瀧伝説が残る興味深い地域でもあります。今回の中世期における集石造構の検出により、丸子山が養老谷集落の信仰対象として位置づけられ、当時の風習に触れることができたことは有意義なことがあります。

こうして地域の歴史や文化財保護に対する理解と关心を深めるうえで広くご活用いただければ幸いに思います。

最後になりましたが、調査にあたって全面的にご協力をいただきました多くの関係者の皆様に厚く御礼を申し上げます。

平成 22 年 3 月

益田市教育委員会
教育長 三浦正樹

例 言

本書は 2008(平成 20)年度に、益田市教育委員会が島根県益田県土整備事務所の委託を受け実施した県道三隅美都線改良工事に伴う丸子山遺跡の発掘調査報告書である。

1. 発掘調査は平成 20 年 7 月 2 日から同年 7 月 18 日まで行い、一時中断し 9 月に再開、完了した。
2. 調査に要する経費は島根県益田県土整備事務所が負担した。
3. 発掘調査を行った地番は島根県益田市美都町宇津川ハ 1089 番地である。
4. 調査は下記の体制で行った。

調査主体	益田市教育委員会
事務局	益田市教育委員会文化財課
調査員	同主任主事 大野芳典
調査補助員	同嘱託職員 池本篤 世良啓
調査指導	島根県教育庁文化財課 是田敦 島根県文化財保護審議会委員 田中義昭 益田市文化財保護審議会会长 村上勇 浜田市教育委員会 柳原博英

5. 現地調査、資料整理については、上記調査指導の先生方の他、以下の方々から有益なご助言をいただいた。(五十音順、敬称略)
大庭康時(福岡市教育委員会)、小野正敏(国立歴史民俗博物館副館長)、中村友博(山口大学人文学部教授)西尾克己、守岡正司(島根県教育庁文化財課)、渡邊友千代(益田市匹見上地区振興センター長)
6. 調査に従事していただいた方々は次のとおりである(敬称略)。
 - 発掘調査作業 潮一男、梅津照子、岡原良夫、花本清勝、藤岡千鶴子
 - 室内整理作業 梅津照子、岡原良夫、藤岡千鶴子、野村初恵、又賀大輔
7. 採図中の方位は磁北を示す。
8. 本書掲載の遺跡出土資料及び実測図、写真等の資料は益田市教育委員会で保管している。
9. 本書の編集及び執筆は大野が行った。

第1章 調査の経緯と経過

1. 事業概要

事業者である島根県益田国土整備事務所は、県道三隅美都線改良工事に伴い、平成19年12月21日付けで分布調査を益田市教育委員会に依頼した。益田市教育委員会は、工事対象地の一部が鍛冶平鉛跡周辺であること、古代の養老龍伝説や中世の養老谷城跡に関連する集落と推測されることから、試掘調査を実施することを報告した。

2. 埋蔵文化財の取扱

益田市教育委員会は、対象地に試掘調査を10箇所実施し、掘削予定の山頂部における雑木の茂みの中で集石の一部を確認した。養老谷集落の中央に位置する丸子山周辺には、近代の祠跡や近世の墓所が残っており、その集石が何らかの遺跡である可能性を持つと判断した。一方、残土処理関連の山裾では鉄滓を含んだ石垣や、木炭や鍛冶滓を含む土坑4基を確認した。これらの結果をもとに平成20年4月8日付けで発掘調査の必要性を協議した。

これを受けた事業者は、事前に発掘調査が必要との承諾をふまえ、平成19年度当初から山頂部での試掘調査の継続と鍛冶平鉛跡の本調査について、平成20年6月11日付けで委託契約を締結のうえ、発掘調査を実施することとなった。

試掘調査の追加を6月23日から実施した。山頂部の集石について、雑木の伐採後に東西約5mの範囲に石が集中し、時期は不確定であるものの、規則性を持つ集石遺構と判断し、平成20年7月4日付けで遺跡発見通知を提出した。遺跡名は、山頂部周辺の墓など時期が不確定であるものも含めて丸子山遺跡とした。

事業者より平成20年7月7日付けで埋蔵文化財発掘届出が提出され、益田市教育委員会から島根県教育委員会に対して平成20年7月10日付けで埋蔵文化財発掘通知を提出した。

3. 発掘調査の経過

発掘調査は、丸子山山頂部を7月から本調査、北側斜面や集石南側に残る墓らしき集石を工事時での立会調査で対応することとした。

山裾の鍛冶平鉛跡について、計画変更で盛土対象地となり、遺構は一部半裁状態ではあるが、現地に保存されることとなった。遺跡の面積は、推定100m²である。

本調査の着手は7月中旬に開始し、7月18日には、遺物を取り上げ後の集石を残した状態で一時中断し、南側の工事立会調査と兼ねて9月

の下旬に再開した。

なお北側斜面、南側の立会調査では遺構や遺物は検出されなかった。

最終的な本調査と立会調査面積は約100m²である。

平成21年度には資料整理を実施し、報告書作成を取り組んだ。

調査の成果は、市内の発掘調査速報展や美都町内公民館の各種講演会、文化祭等に展示・報告し活用した。



第1図 益田市美都町の位置

第2章 丸子山遺跡の位置と環境

1. 地理的環境

遺跡の位置

丸子山遺跡は島根県益田市美都町宇津川に所在する。遺跡のある美都町は、中国山地の嶺線に近い山間地帯に位置し、益田市の東南部を占める。

主要河川としては東南部の春日山に源を発し、町域を西下して日本海に注ぐ益田川と、三隅川の支流である板井川、矢原川、丸茂川がある。生活域はこれら河川の流域に形成された盆地状の平地に展開する。すなわち、西から益田川筋の東仙道地区、都茂川との合流地が都茂地区、矢原川筋が二川地区である。宇津川地区は二川地区に含まれる。

JR 益田市駅からは国道 191 号線を経て、直線距離で南東部に約 25km の距離にある。

中国山地に流れを発する三隅川は、山間部を北流して日本海へ注ぐ。丸子山遺跡はその支流、矢原川が形成する小規模な盆地の中央部に立地する「丸子山」の山頂部である。標高は約 196 m、川との比高は約 40 m である。

2. 歴史的環境

以下では丸子山遺跡を中心とする周辺地域、主に美都町の遺跡の概要を各時代について述べる。なお文中の（数字）は第1表の番号と対応している。

古代

縄文時代の遺跡としては、二川地区に位置する黒曜石や石斧、晩期上器が出土した本郷遺跡（49）、東仙道地区の前遺跡（61）では浅鉢が出土し、晩期の遺跡として知られる。

弥生時代の遺跡としては、酒屋原遺跡では前期の土器が出土し、龍光遺跡（68）、下都茂原遺跡（74）、大年ノ元遺跡（65）、唐干田遺跡（64）では流れ込みと思われるが、後期の土器が出土し、集落の存在が窺える。

古墳時代では、後期以降の横穴式石室を主体部にもつ三谷古墳（4）が代表的である。2基現存し、割石積みのやや胴張状無袖石室であり、三谷川に沿う平地を見下ろす山腹に開口している。三谷川筋の平地に古代集落を形成していく村落的首長層が葬られたものと推定できる。

奈良・平安時代には、古代政権がまとめた記録、『続日本後紀』の承和3年（八三六）、『日本三代實錄』の元慶5年（八八一）の記事で、「都茂郷丸山」での飼山開発に関するものが記載されている。9世紀代にこの飼山操業に当時の政府が本腰を入れて取り組んでいた様子が窺える。

酒屋原遺跡では、多数の古代須恵器と円面鏡数点、豊富な輸入陶磁器が大量に出土し、古代の役所関連遺跡から在地領主の拠点的遺跡への変遷を推測させる貴重な遺跡である。また下都茂原遺跡では、綠釉陶器、黒色土器が出土し、役所関連遺跡として注目される。唐干田遺跡、大年ノ元遺跡、本郷遺跡からも古代から中世にわたる上器が出土しており、それぞれの地区で中核的な集落が存続・発展しつつある様相が垣間見られる。

中世以降

中世前半の遺跡としては、栗島原遺跡（57）と東仙道土居遺跡（58）が特に注目される。栗島原遺跡は三谷川筋の河岸段丘上に位置し、同安窯系青磁碗、白磁皿、白磁合子、湖州鏡などが副葬された墓地で、東仙道土居遺跡においては、三谷川と益田川の合流点付近に位置し、館推定地の一画から五輪塔や日引石製宝篋印塔とともに褐釉四耳壺、常滑系壺、土師質土器壺を副葬器とした集石墓が発見されている。東仙道地区に有力な土豪勢力が盤踞していたことが想定される。

中世後半の遺跡としては、都茂地区山本の大年ノ元遺跡、丸茂の森下遺跡（68）が注目される。大年ノ元遺跡は益田川の扇状地にあり、銅精錬に関する方形堅穴建物や掘立柱建物数棟が検出され、周辺から陶磁器類・銅滓が出土している。丸茂城の東側に位置する森下遺跡では、青白磁梅瓶や天目茶碗等の出土により在地領主丸茂氏の館跡と推定されている。

二川地区の中世遺跡としては、湖州鏡が出土した本郷遺跡のほか、室町時代頃の青磁、備前が出土した大切遺跡（市営住宅地周辺）（72）がある。

三隅川流域の山城では、宇津川城（17）が宇津川の中心地、矢原川右岸へ北に向かって突き出る尾根尖端にある。宇津川要害とも称し、築城時期は不明であるが、弘治二年（一五五八）七月四日の益田藤兼感状（侯賀文書）に「宇津川城」とみえ、毛利氏と益田氏との間で激しい戦闘が展開されたという。周辺には堅堀等をもつ板井川城（16）、丸茂城（19）が築かれ、益田氏と、毛利氏や三隅氏との間での緊張が窺える。

中世において、益田氏は南北朝期に三宅御上居を築き拠点とした。その前段階の鎌倉時代には東仙道を拠点としたと考えられている。これら益田川上流域での遺跡調査からの具体的な様相の解明が今後の研究課題である。

また、銅山経営の発展により、都茂地区、中でも山本地区は江戸時代には大森銀山の支配下にあり、「銀山大領地」として隆盛を極めたと伝えられている。能登川の谷沿いに残る屋敷跡・寺院跡等には銅の採掘と製（精）錬に関わる遺跡と考えられる。美都町内で所在が確認されている製鉄関連遺跡については、中・近世に當まれた「たたら」跡もしくは銅製（精）錬に関わる遺跡と考えられる。未発掘調査であるが、産業史・銅山史の解明に今後の調査が期待される。

3. 調査対象地周辺（養老谷集落）と養老瀧伝説

丸子山から川を挟んで北側には養老谷城がある。別名は潮城で、「要害」「城ノ平」「堀田平」「馬場」などの地名が残っている。潮氏は筑國時代頃、この地を治める牛尾氏が、養老瀧伝説に因み潮と改名したと伝えられている。

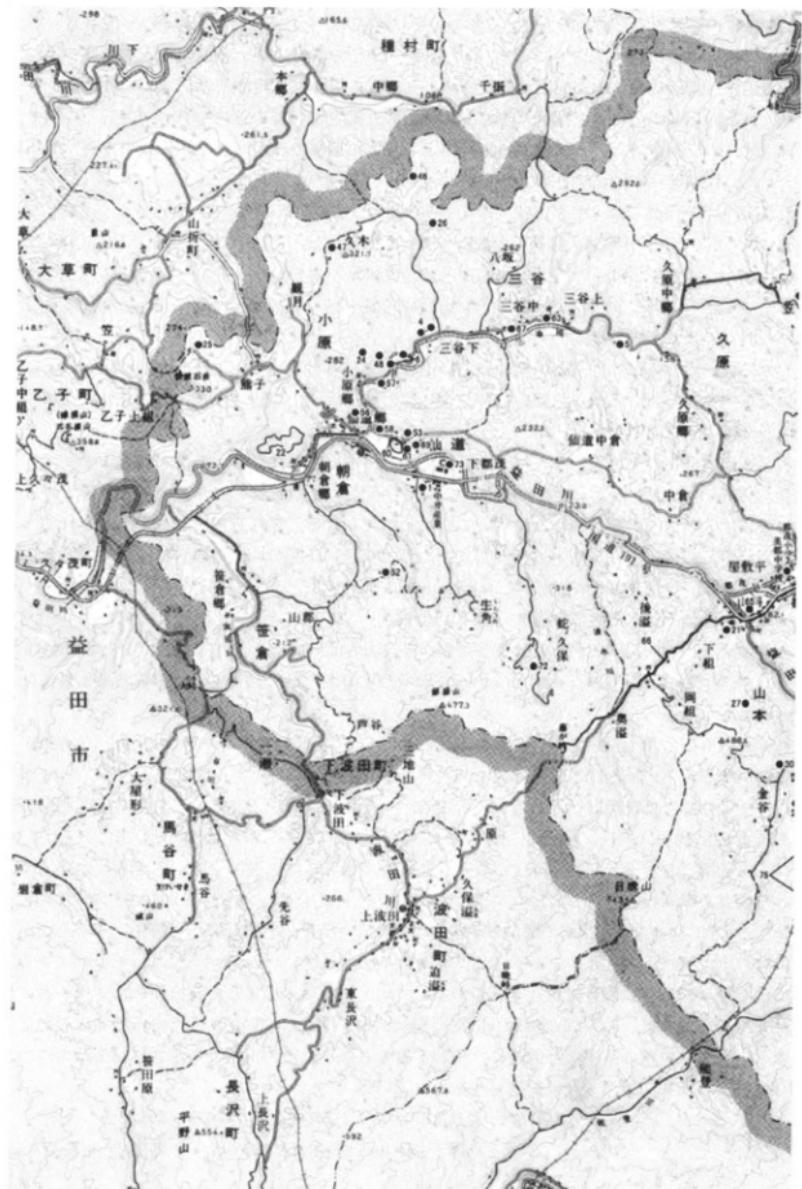
西側丘陵部には浄土真宗本願寺派養老山光雲坊（1700 年代創設）があったとされ、「寺山平」の地名が残る。その前面は「宮ヶ原」、「石木戸」である。

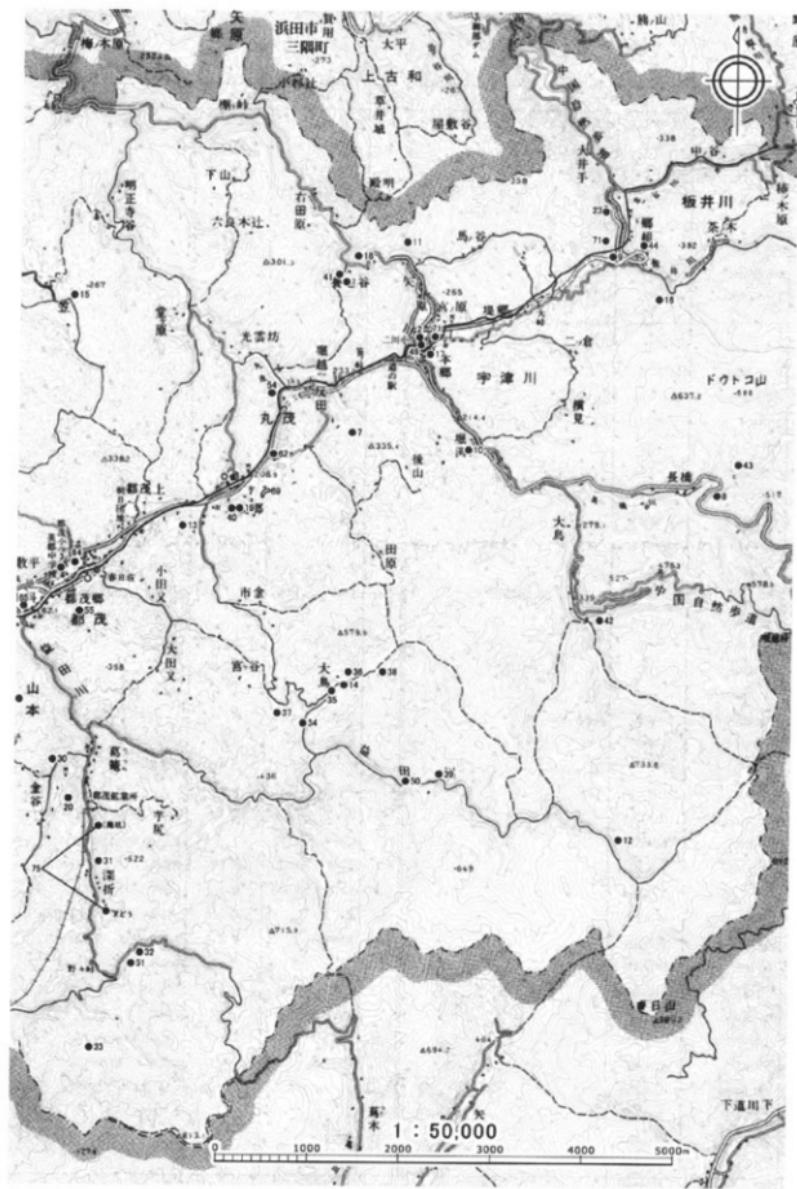
丸子山南側には丸茂地区へ通じる往還がある。その南端、矢原川左岸の養老谷集落南側山腹に熊野権現を祀る祠がある。「権現」の地名が残っている。祠のそばに大岩が突き出ているが、ここは「文徳実錄」齊衡元年（854）七月二三日条の「石見国言、醴泉出、三日乃瀧」の記述にかかる瑞兆の滝「養老瀧」と伝える。「味、濁醸ヲ泻シ、状ハ芳體ニ凝ス」とあり、どぶろくのような味で、甘酒のような水が大岩の間から湧き出たことで、当時の美濃郡の大領が朝廷に献上したところ、朝廷では瑞兆であると非常に喜び、元号の仁寿 4 年を齊衡元年に改めるなどしたというのである。

嘉永 6 年（1853）に熊野権現社千手祭が執行され、この時に列席した波田神社宮司田中貢の記した「養老瀧醴泉記」も、「文徳実錄」に拠る孝女伝説等を記している。付近には養老谷の地名、養老という家号、潮の苗字など伝説にまつわるものも多い。市の史跡に指定され、集落の養老瀧保存会により大切に管理され、秋に祭を行っている。

参考文献 鈴攻信市著 1968『美都町史』美都町史編纂委員会

内藤正中編 1995『日本歴史地名体系 33 島根県の地名』平凡社

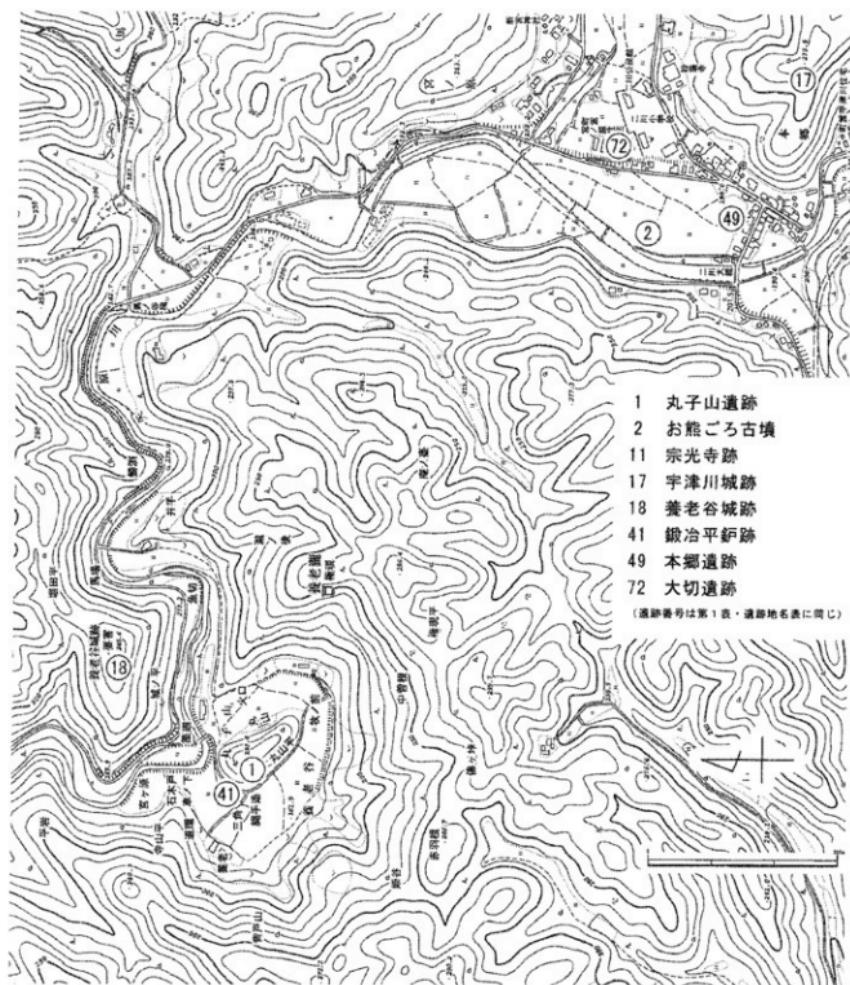




第3図 美都町内遺跡分布図2（都茂・二川）

番号	名 称	種 別	類 型	番号	名 称	種 别	類 型
1	丸子山塗跡	古又は庭塀	集石遺構、土器質土器窓、大鉢、錢貨	40	馬頭御跡	製鐵遺跡	
2	お城ごろ古墳	古墳	円墳、石積墳丘、出城	41	諏治平御跡	製鐵遺跡	
3	塙敷平塹穴・造跡	横穴・放石地	上部露、石室、滑跡	42	人馬御跡	製鐵遺跡	
4	三谷古墳群	古墳	2基	43	シャレ御跡	製鐵遺跡	
5	三谷1号墳	古墳	円墳、須恵器	44	森平御跡	製鐵遺跡	
6	三谷2号墳	古墳	円墳、須恵器	45	豊ヶ崎御跡	製鐵遺跡	
7	都賀横穴跡	横穴	刀劍	46	土井山城跡	城跡	
8	小原古墳群	古墳	2基	47	久木羅塚	冢塚	
-1	小原1号墳	古墳	須恵器、精神性	48	竹坂跡	城跡	
-2	小原2号墳	古墳	円墳、須恵器	49	本郷遺跡	表文化地	漢文土器、石斧、石鑿、須恵器
9	丸茂上経塚	経塚		50	葛根彦経塚	経塚	
10	長崎の庵寺跡	寺院跡		51	安養寺跡	寺院跡	
11	赤松谷上御跡	寺院跡		52	光明寺跡	寺院跡	
12	赤松谷上御跡	製鐵遺跡		53	相続地跡	寺院跡	古島(品川大橋)
13	古城山城跡	城跡		54	城ヶ谷城跡	城跡	山城、郭、唐切
14	衣笠山跡	製鐵遺跡		55	郡茂城跡	城跡	山城、郭、堀切
15	鈴木御跡	製鐵遺跡		56	青戸山城跡	城跡	山城、郭、堀切
16	板井川城跡	城跡	山城、郭、堀切、堅壁	57	栗島原遺跡	古墓	青白磁、白磁小皿、小盒、鉢、瓶、環
17	宇宿川城跡	城跡	山城、郭、堀切	58	東仙道土性遺跡	その他	中田製金、中清吉窯、十郎賣金
18	黄老谷城跡	城跡	山城	59	水池遺跡	散布地	宇置印塚の一部、加T石(五輪塔一部)
19	丸茂城跡	城跡	山城、郭、連続監視群	60	満原原遺跡	集落跡	陶文土器、弥生十器、須恵器
20	人船山城跡	城跡	山城	61	焼造跡	散布地	陶文土器片、弥生土器片、十勝西片
21	寅室山城跡	城跡	山城、石垣、堀切	62	丸茂宮下遺跡	散布地	須恵器、土師器、陶器
22	四ヶ山城跡	城跡	山城、郭、井戸、堅壁	63	寺教寺下遺跡	散布地	須恵器、土師器、青磁
23	箕山島跡	古墳	五輪塚3基	64	市干ノ原遺跡	散布地	土師器片、余生十器片、陶磁器片
24	横浜御跡	製鐵遺跡		65	大牛ノ原遺跡	集落跡	獨立柱建物跡、堅穴建物跡、陶器器
25	北ヶ遺納跡	製鐵遺跡		66	津和野夷筋往還	街道跡	土師器、網津、铁滓
26	新泥濘加跡	製鐵遺跡		67	大石前遺跡	散布地	土師質土器、陶器
27	金ヶ崎御跡	製鐵遺跡		68	龍光遺跡	散布地	石積墓、弥生土器、須恵器、陶磁器
28	火の追跡	製鐵遺跡		69	森下遺跡	集落跡	獨立柱建物跡、磚石建物跡、須恵器
29	金星敷御跡	製鐵遺跡		70	仙道宮ノ原遺跡	散在地	十郎賀土器、陶磁器、不詳
30	谷谷御跡	製鐵遺跡		71	七井古墓	古墓	五輪塚2基
31	深保御跡	製鐵遺跡		72	大切遺跡	散布地	土師器、陶磁器
32	化粧谷御跡	製鐵遺跡		73	藍明古墓	古墓	宜興印塚3基
33	次屋床御跡	製鐵遺跡		74	下那茂原遺跡	集落跡	独立柱建物跡、須恵器、土師器
34	諏治塙敷御跡	製鐵遺跡		75	那波古山	細山跡	鍍神陶器、黑色土器、陶磁器、井戸
35	大切御跡	製鐵遺跡					
36	東原能御跡	製鐵遺跡					
37	猪地御跡	製鐵遺跡					
38	川代御跡	製鐵遺跡					
39	伊原御跡	製鐵遺跡					

第1表 美都町内遺跡地名表



第4図 遺跡の位置と地形

第3章 調査成果の概要

1. 調査区の概況

立地状況

調査区は、益田市美都町字津川地区養老谷集落、矢原川が形成する小規模な盆地の中央部に立地する「丸子山」の山頂部である。標高は約 196 m、川との比高は約 40 m である。

川を挟んだ北東方向には養老谷城（潮城）跡が位置し、西側丘陵部には淨上真宗本願寺派養老山光雲坊（1700 年代創設）があったとされ、「寺山平」の地名が残る。南側には丸茂地区へ通じる往還がある。四方を一望できる格好の場所である。

また、盆地南側山腹には市指定史跡「養老瀧」が存在し、熊野権現を祀る。この瀧は、「文徳実錄」齊衡元年（854）の石見国醴泉記述にかかわる瑞兆の瀧と伝える。

山頂部における調査区では、祠跡とその背後に集石を確認した。祠の創建時期は定かではないが、廃絶は昭和初期である。祀られていた地蔵は江戸期のものと考えられるが定かではない。瓦については明治初期の石州瓦を含む。この祠は、背後の集石北側の一部を削って平坦面を造り創建したものと考えられる。西側には江戸期の墓と立石の墓が混在し、墓標には近藤家のものも確認できた。近藤家は明治初期、丸子山山麓にて鍛冶を經營した。その場所が鍛冶平鉋跡である。

ちなみに、南西部の尾根先端では集石はみられないものの、小規模な平坦面を確認できた。

調査前状況

調査前は、雜木が生い茂り、集石を太い根が覆っていた。後で触れるが、中央土坑内も根による攪乱が著しい。

調査経過

調査は、立ち木の伐採後に周辺の地形測量後、南北と東西の尾根主軸に沿ってサブトレントを追加し、旧表土、地山までの土層確認を行った。

集石の記録については、次の状態で実施した。

第1段階：雜木伐採後の表出状態

第2段階：企画性をもって構築されたと考えられる状態

第3段階：敷石を検出した状況

集石中央には平石があり、その下から土師質土器の頸部が出土した。結果として、壺が埋置されており、底部から大錢を含む銭貨が出土した。その実測、取り上げを行い完掘後に旧地表の測量を行い終了した。

祠跡については、礎石を実測、取り上げを行った。その中央に直径約 20cm の土坑を検出したが、遺物は出土していない。祠跡の北側については、旧参道が残りさらに 3m 下に、現状は竹藪の平坦面を確認した。付属施設の可能性を考え、約 10 m² のトレント調査を実施した。瓦が数枚出土したが、遺構は確認できなかった。

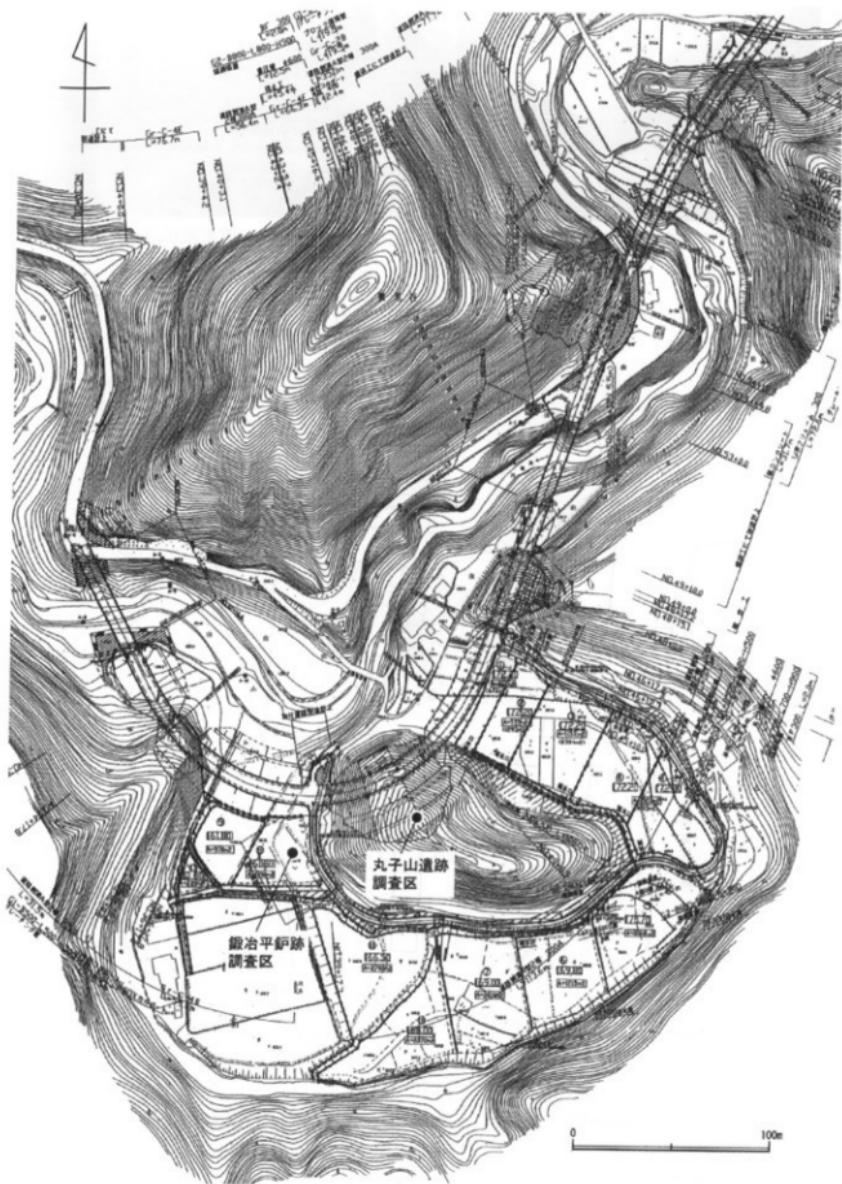
2. 調査成果の概要

遺構等の概要是以下のとおりである。

中世の墓または経塚と考えられる集石遺構 1 基、近代の祠跡 1 基、近世の墓数基である。

この丸子山は中世から連続としてこの地域の墓所とされた場所であった。

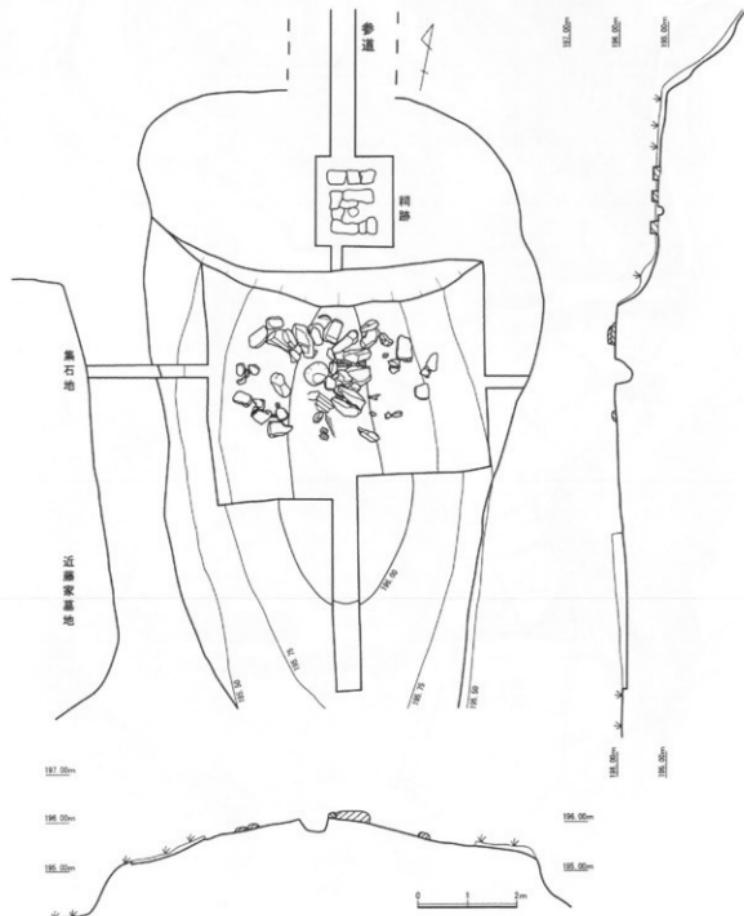
周辺には養老谷城（潮城）跡、養老瀧伝説地としても知られる集落の一角で初めて行った本発掘調査で、遺構や遺物資料を得ることとなった。



第5図 調査区位置図



丸子山遠景（西から）左側奥：養老谷城（潮城）、右側奥：養老瀧伝説地



第6図 調査区位置図

3. 遺構

集石遺構

形態・規模

集石の形態は、ほぼ円形もしくは多角形を呈するものである。ただし、北側については祠跡が残る平坦面造成による掘削を受け、南西部の集石については、祠の礎石や南西部の近世墓石に使われており、残存していない。

集石規模は、東西約4m、南北推定約4m。東西の側面には平石が確認でき、それは土留めや区画を示すものと考えられ、それらを含めると、東西約5mを測る。残存の高さは中央部で約40cmを測る。

築成

集石は、まず、山頂部の地山を削りだして整え、約20×60cmの川石を花弁状に配し、その上部、周辺に拳大の石を敷いている。その範囲は東西約4mである。そして、約30×30cmの角・円状石で上位を覆う構造と推測される。裾部には区画を示す平石を配すが、確認できたのは、東部、西部、南東部のみで、周辺にも原位置を示さない平石が多くある。

集石中央部にも平石があり、その下から土師質土器が出土している。その平石は、配石上面レベルと水平に配されたと考えている。土器の埋置と花弁状の配石との築成順序は土層から判断できなかった。

中央土坑

中央土坑は、土師質土器壺が埋置されたものである。規模は直径約30～40cmの深さは約20cm程度である。よって、壺の復元器高が約43cmであるので、壺の下半部のみが地中に埋まっていたことになる。

土師質土器壺の埋置構造と錢貨の出土状況

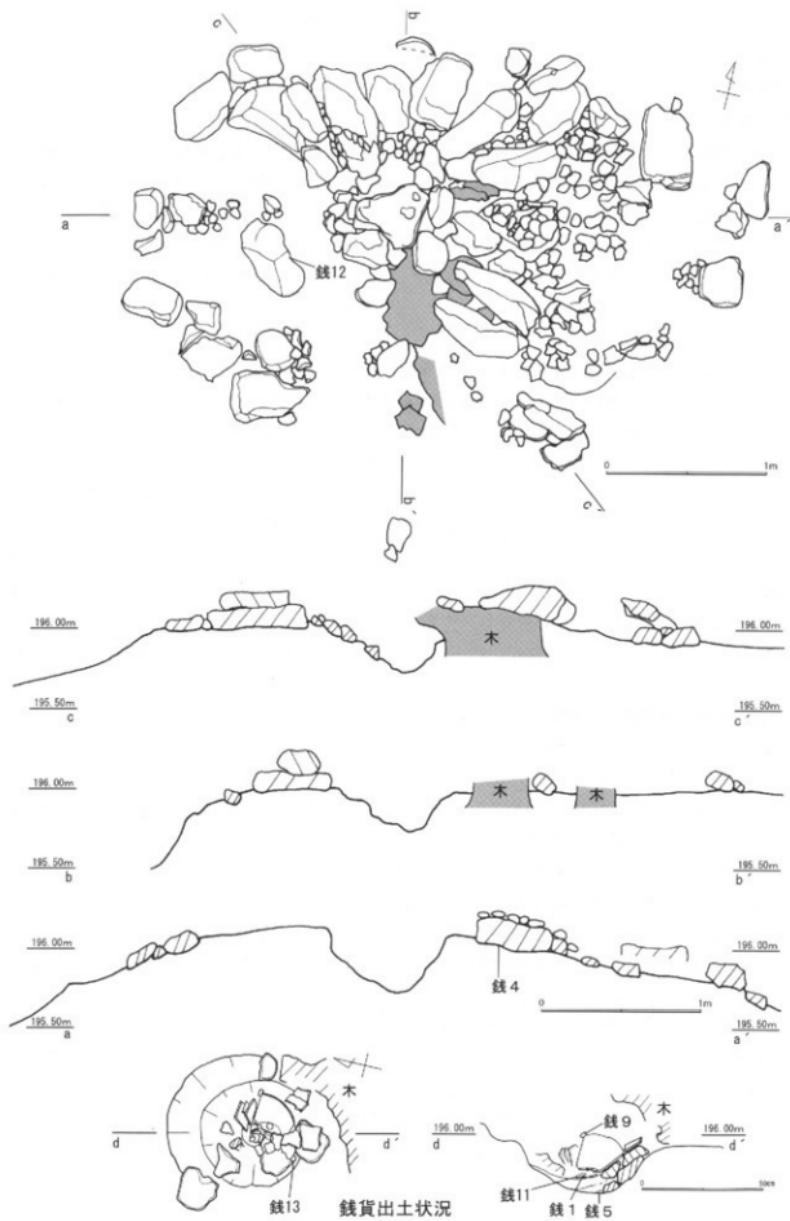
土師質土器壺は、木の根の攪乱により、東側底部の一部のみが原位置をとどめていた。

また、壺の東側は隙間なく地山に接しており、その隙間から錢貨が1枚、南側は根が覆っているものの、壺の側面を固定するための石の間から錢貨が2枚、底部が平らな壺を埋置するために整えた土の最下部に錢貨が1枚出土している。

集石の中央部上層から破片を取り上げていったが、その破片の間から錢貨が6枚出土している。それらの下には約5cm程度の小石が詰まっていた。これが意図的なものなのかは判断できなかった。ちなみに小石を取り上げて洗浄を試みたが、文字などは見受けられなかった。その下の約5cmの土を除去した後、大錢を含む錢貨が12枚見つかった。大錢は、ほぼ中央で2枚重なっているうちの下位で、壺の底部にはりついていた。

壺の上半部は拳大の敷石によって埋められていたと考えているが、壺胴部片の出土状況やその3割程度が見当らないこと、南西部の配石は後世に祠や墓に転用されていることを勘案すれば、根の攪乱以外に、後世における人為的な壺上半部への攪乱も考えられる。

なお、東側の配石の下部、西側の敷石の間、南西部の攪乱部から錢貨が1枚ずつ出土している。これらのことから、錢貨は、方位を意識した使用、または境界を示すために撒いたと考えられるのではないだろうか。



第7図 集石造構図及び中央土坑内遺物検出状況

4. 出土遺物

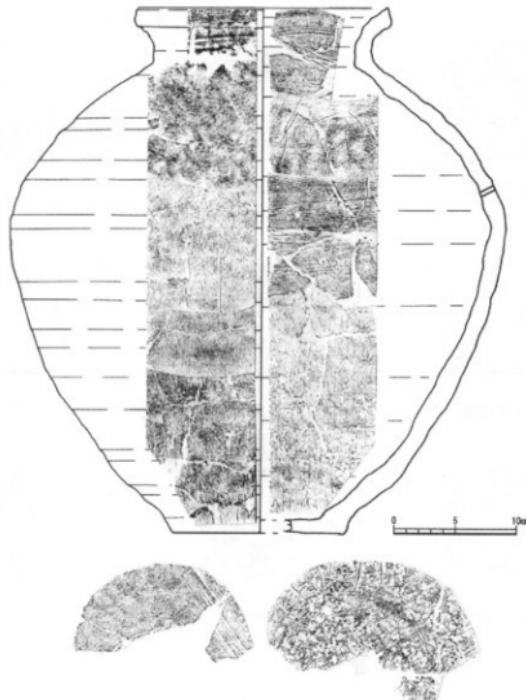
遺物は、集石の中央土坑から出土した土師質土器の壺と、その内部や集石周辺から出土した錢貨である。

土師質土器壺

復元された器高は、約43cm、胴幅約41cm、口径は20.5cm、底径は14cmを測る。焼成はほぼ良好で、胎土は密である。出土した破片は、全体の8割を接合・復元が可能であった。しかし、口縁部は8割、胴の上半部は3割が欠損している。胴部に対し、口頸部は短く、口縁部は玉縁状に肥厚し、口唇部はやや尖り気味で丁寧に仕上げられている。

内外面共にろくろによるナデ調整が丁寧である。外面肩部は、やや張った印象を受け、一箇所穿孔がみられる。底部にはヘラおこし痕が残り、中央部は復元時に破片が無いこと、器壁の断面が古い印象を受けることから、大きく穿孔されていたと考えている。内面は、ほぼ全面にハケ目を施し、上半部と下半部の雑目が明瞭である。色調について、外面は鈍い黄褐色を呈すが、胴部の一部が灰褐色に変化している。内面は黄褐色である。

産地、時期については、近隣に類例が得られておらず、不明である。在地産の可能性があるが、全体的に丁寧に仕上げられている。



第8図 出土遺物実測図1



崇寧通寶

0 1 2 3cm



開元通寶



至道元寶



至道元寶



皇宋通寶



皇宋通寶



皇宋通寶



皇宋通寶



皇宋通寶



熙寧元寶



元豐通寶



聖宋通寶



大觀通寶

第9図 出土遺物実測図2

錢貨

錢貨は集石周辺から合計 25 枚出土した。そのうち、腐食が著しく、取上時や整理時に消滅したものもあり、図示したものは 13 枚である。また、火を受けた感じは見受けられない。

1 は大銭「崇寧通寶」である。通常の小平銭よりひとまわり大きく 3.5cm を測る。初鋤年は 1102 年である。7.1g である。2 は唐銭、3~13 は北宋銭である。詳細は、第 2 表、第 3 表に記した。

錢径・内径・錢厚: cm

博団番号	出土位置	錢名	錢径	内径	錢厚	量目 (g)	書体	初鋤年	備考
1	壺底最下部	崇寧通寶	3.5	3.2	0.25	7.1	楷書	1102	大銭
2	壺破片中	開元通寶	2.4	2.1	0.11	1.8	隸書	621	
3	壺破片中	至道元寶	2.5	2.3	0.13	3.1	草書	995	
4	東配石下	至道元寶	2.5	2.4	0.14	2.3	楷書	995	
5	土坑最下部	皇宋通寶	2.5	2.1	0.11	2.7	楷書	1038	
6	壺底部	皇宋通寶	2.4	2.1	0.15	2.3	楷書	1038	
7	壺底部	皇宋通寶	2.5	2.1	0.13	1.7	篆書	1038	
8	壺底部	皇宋通寶	2.4	2.1	0.13	2.2	篆書	1038	
9	壺東外部	皇宋通寶	2.4	2.1	0.12	1.9	篆書	1038	
10	壺底部	熙寧元寶	2.4	1.9	0.09	2.9	楷書	1068	
11	壺底部	元豐通寶	2.4	1.9	0.13	2.3	行書	1078	
12	南西櫻乱部	聖宋元寶	2.4	1.9	0.09	1.8	行書	1101	
13	壺南固定石	大觀通寶	2.4	2.1	0.12	1.3	楷書	1107	

第 2 表 出土錢貨観察表

種類	初鋤年	枚数	時代	備考
開元通寶	621	2	唐	
至道元寶	995	2	北宋	
皇宋通寶	1039	6	北宋	
熙寧元寶	1068	1	北宋	
元豐通寶	1078	1	北宋	
崇寧通寶	1102	1	北宋	大銭
聖宋元寶	1101	1	北宋	
大觀通寶	1107	1	北宋	
不明	-	10		
合計		25		

第 3 表 出土錢貨枚数

第4章　まとめ

調査箇所は益田市美都町宇津川地区養老谷集落、矢原川が形成する小規模な盆地の中央部に位置する「丸子山」（標高約 196 m）の山頂部である。

川を挟んだ北東方向には「養老谷城（潮城）跡」、南側には丸茂地区へ通じる往還、北側丘陵部には淨土真宗養老山光雲坊（1700 年代創設）があったとされ、「寺山平」の地名が残る。

また盆地南側山腹には市指定史跡「養老瀧」が存在し、熊野権現を祀る。この瀧は、「文徳実錄」齊衡元年（854）の石見国體泉記述にかかる瑞兆の瀧と伝える。

山頂部における調査地では、祠跡とその背後に集石を確認した。

集石は、約 20×60 cm の川石を花弁状に配し、その上部や周辺に拳大の石を敷き、さらに 30×30 cm の角・円状石で覆う構造であった。

遺物としては、集石中央部から土師質上器の壺が出土したが、その産地・時期は不明である。

内部には、出土位置は纏っていないが、錢貨が納められ、特に大錢の「崇寧通寶」1 枚を含んでいる。錢貨は、確実に壺の外部での出土は 4 枚で、周辺部出土のものも併せて 25 枚であった。

錢名が判読されたものについていえば、鋳造年代から 12 世紀初頭が上限である。ただし、これらの遺物は伝世、経年使用が充分考えられ、検討を要する。また、壺上半部片の出土状況やその 3 割程度が見当らないこと、南西部の配石は後世に祠や墓に転用されていることを勘案すれば、根の擾乱以外に、後世における人為的な擾乱も考えられる。

大錢は、一般的な集落で出土する錢貨ではなく、西日本を中心とする都市、墓、経塚、祭祀遺構などで単独で出土する例があり、経済行為とは別の付加価値をもつて 1 枚単位で使用されている場合が認められている。全国における出土枚数は 200 枚程度で、島根県内では、市内の沖手遺跡、浜田市の古市遺跡で出土例がある。いずれも中世前半を盛期とする地域的拠点的な遺跡である。古市遺跡ではピットの下部に単独で出土し、何らかの祭祀に関わる使用と考えられている。

これらのことから、中世における墓もしくは経塚の可能性がある。

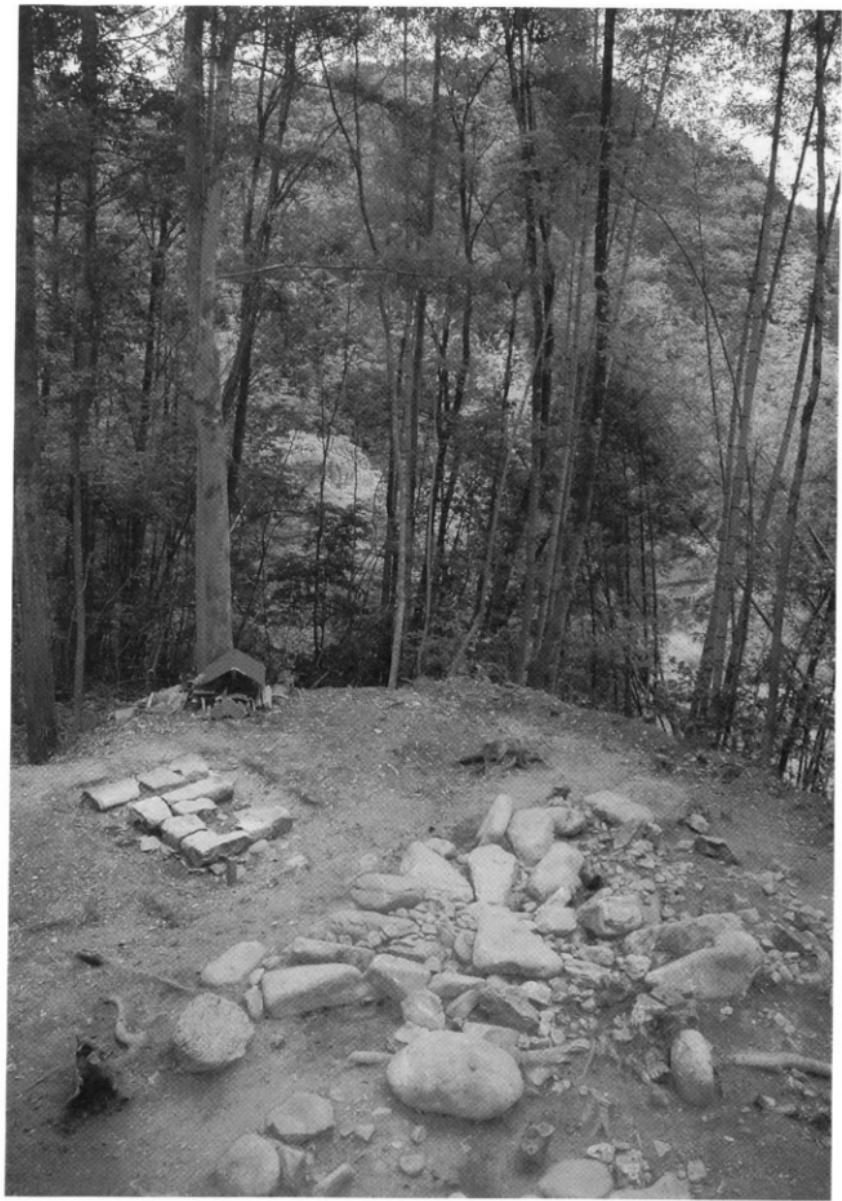
経塚であれば、周辺の拳大の石に文字は無く、其伴品（鏡・剣）が無いことから、決定打が弱い。また、中世墓における花弁状の配石は中国地方では類例を求めることができない。绳文時代の配石遺構を想像させるこの集石は、四方を見渡せ、この地域における何らかの信仰に対する祭祀遺構の可能性もある。今後の資料の追加を期待したい。

また、配石や錢貨の出土状況が方位や範囲を意識していると考えられるものの、中世の宗教的、あるいは祭祀的な視点からの検討をすることができない。今後の課題としたい。

周辺の中世から近世における領主は潮氏と伝えられている。集落内の寺社、山城等には潮氏が関与しているものが多い。今のところ本遺跡と潮氏を結ぶ時期は異なるが、何らかの関連性も含んでおきたい。

養老瀧伝説に象徴されるように、古代から中世にかけて中央政府と当方との流通や政治的関連性を垣間みることのできる貴重な資料を得ることができた。

最後に、現地調査から報告書の刊行に至るまで多くの方々の御指導と御協力いただいた各位に深甚の謝意を申し上げる次第である。



丸子山遺跡から見た養老谷城（潮城）



養老瀧伝説地（大岩、祠、大銀杏）



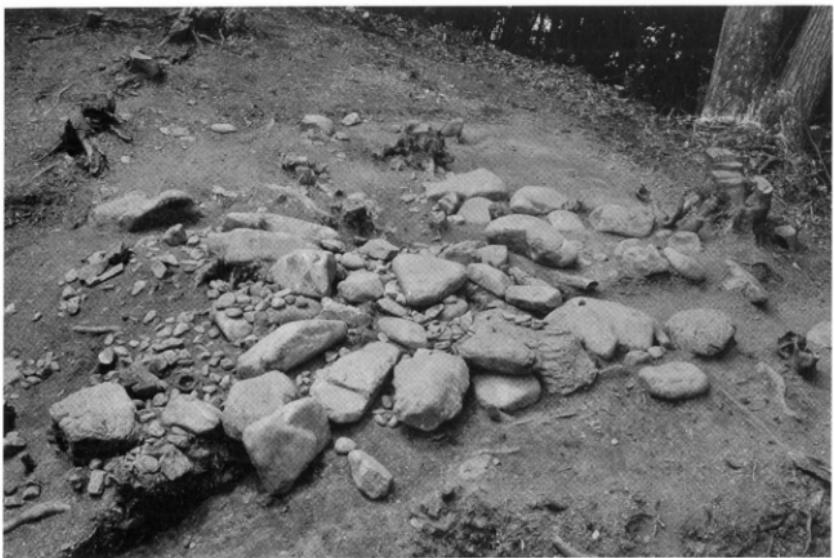
丸子山遺跡調査前（北から）



調査地遠景 雜木伐採後（南西から）



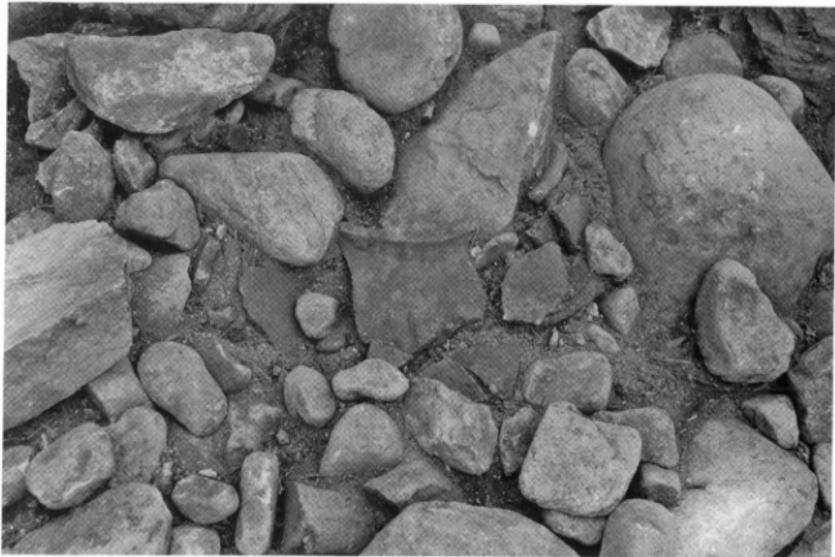
調査地遠景 敷石検出状況（南西から）



集石検出状況（北から）



集石検出状況（南から）



配石中央平石除去後 土器出土状況（北から）



中央土坑内 錢貨出土状況



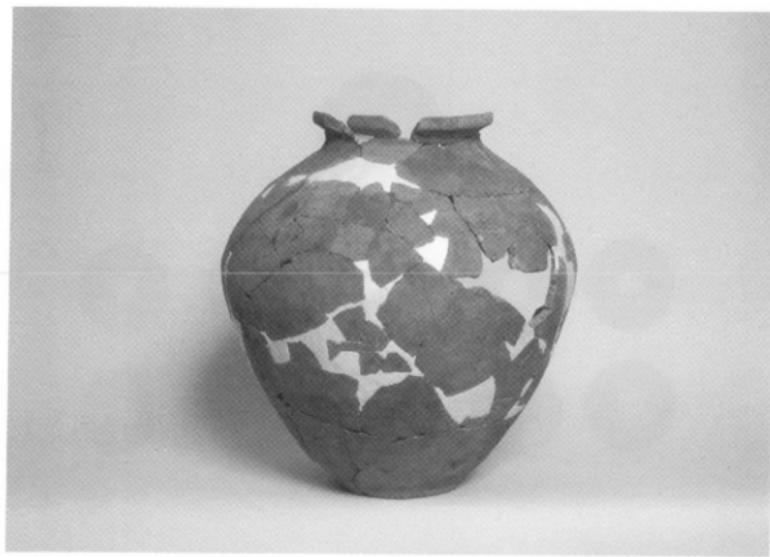
配石中央 遺物出土状況（西から）



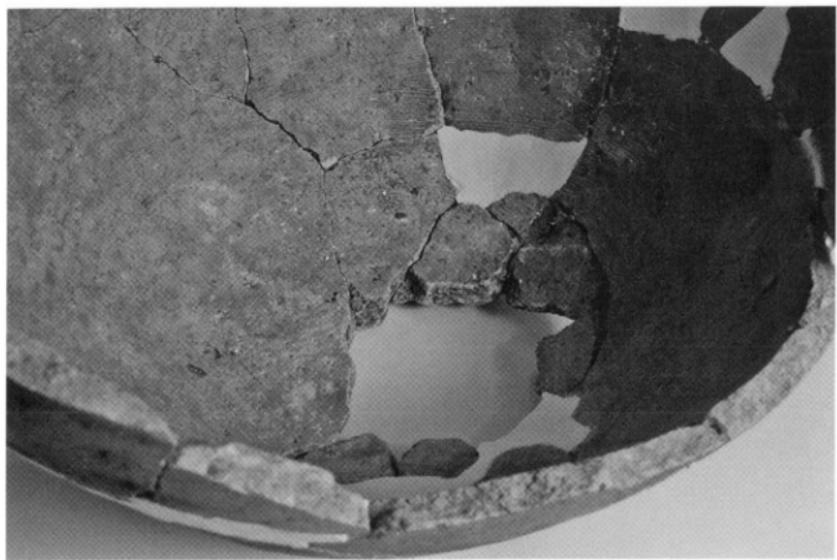
土師質土器内銭貨出土状況（西から）



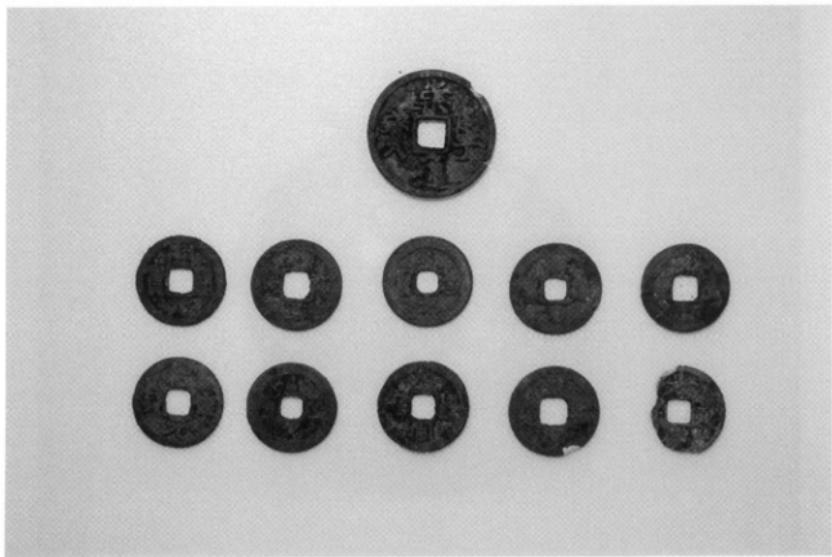
中央土坑完掘状況（南西から）



土師質土器壺



壺底部 内面



銭貨と大錢

報告書抄録

ふりがな	まるこやまいせき							
書名	丸子山遺跡							
副書名	県道三隅美都線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
卷次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編集者名	大野芳典							
編集機関	益田市教育委員会							
所在地	〒698-0033 島根県益田市元町11番15号 Tel 0856-31-0623							
発行年月日	2010年3月25日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
丸子山遺跡	島根県 益田市 美都町 宇津川	32204	R74	34° 41' 46"	132° 0' 58"	2007.7.2 ~ 2007.9.30	100 m ²	県道 改良 工事
遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
丸子山遺跡	墓又は経塚	中世	集石遺構	土師質土器 銭貨・大錢		花弁状に配石された 集石遺構 土師質土器壺底部に 大錢を含む銭貨		

丸子山遺跡

－県道三隅美都線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

平成22年3月発行

編集・発行 益田市教育委員会

島根県益田市元町11番15号

印刷 のさか印刷